広島大学現代インド研究 ― 空間と社会　Vol.5: 73-75, 2015
Journal of Contemporary India Studies: Space and Society, Hiroshima University

書評 Book Review

長田華子著
『バングラデシュの工業化とジェンダー ― 日系縫製企業の国際移転』
御茶の水書房　2014 年　p.313　ISBN978-4-275-01058-2

宇根義己 *

2013 年 4 月 24 日，バングラデシュで悲惨な事故が発生した。ダッカ郊外に建つ 8 階立ての「ラナプラザ」ビルが倒壊し，ビル内で縫製作業に従事していた労働者など 1,000 名以上が犠牲となった。この事故は大きな衝撃をもって世界中に報道されたが，大事故という点だけでなく，バングラデシュがグローバルな縫製製品の生産・流通構造に組み込まれている点も同時に表している。

バングラデシュは中国に次ぐ世界有数の縫製品生産国として急成長を遂げている。日本の大手アパレル企業も同国で生産，あるいは同国の企業・工場に生産を委託しており，バングラデシュ製の繊維品が日本市場に多く流通している。本書は，このように注目を集めているバングラデシュにおける工業化過程と縫製産業の成長要因分析を踏まえて，マツオカコーポレーション（以下，マツオカ）への聞き取り調査をもとに日系縫製企業の展開実態，女性労働力の熟練度・賃金査定・世帯／世帯保持等に関する分析と企業内技術移転の実態および問題点を明らかにしたものである。また本書は著者の長田氏が大学生時から 10 年近くにわたってバングラデシュを見つめてきた集大成であり，2012 年に授与された学位論文を加筆修正したものである（p.279）。

本書の章構成は以下の通りである。

第 1 章　研究目的・先行研究・研究手法
第 2 章　独立後のマクロ経済政策とジェンダー
第 3 章　工業化の動向と工業政策－縫製産業の誕生と成長
第 4 章　工業化と新しい労働力としての女性
第 5 章　グローバル金融危機後の日系縫製企業の国際移転－株式会社マツオカコーポレーションの事例から
第 6 章　バングラデシュ工場の女性労働力－熟練度・賃金査定・世帯／世帯保持
第 7 章　日系縫製企業の技術移転のジェンダー分析
第 8 章　結論

以下，各章の内容を概略的にまとめる。

第 1 章では，冒頭で本書の主題を「2008 年 9 月のグローバル金融危機以降の日系縫製企業による中国からバングラデシュへの国際的な移転をジェンダーの視点から分析することを通じて，日系縫製企業の国際移転の特徴と課題を明らかに」し，「同時に，日系縫製企業が，バングラデシュ政府が掲げる工業化とジェンダー平等の推進に関するビジョンに対して，何をなすべきかを提起するもの」と明記している（p.3）。本研究が取り上げるマツオカは，中国の自社工場（以下，中国工場）からバングラデシュの工場（以下，バングラデシュ工場）へ技術移転および投資することによってバングラデシュ事業を展開してきた。そのため,「中国からバングラデシュへの国際的な移転」という点に着目している。この章では，グローバルな繊維貿易と日本の繊維品貿易の動向などを中国との関係から論じることによりバングラデシュ縫製業の世界的な重要性や日本との関係を浮き彫りにし，同国を取り上げる意義を示した。また，バングラデシュの工業化，縫製業とジェンダーに関する先行研究の整理とともに課題を挙げ，それを踏まえて本書の枠組みと分析視角を提示している。具体的には, 縫製産業を研究対象とする際, 新国際分業論に基づいて考察すること，事例として日系縫製企業を取り上げる際，分析視角として企業組織論と労働過程論を用いること, また, これにジェンダーの視点を加えること，そしてマツオカのバングラデシュ工場における日本向け低価格帯ショートパンツの生産過程を論じる際，ウォーラーステインの「商品連

* 金沢大学人間社会研究域人間科学系

鎖」概念を援用し，商品連鎖に組み込まれた労働力の再生産を世帯／世帯保持という概念に基づいて把握すること，である。なお，本研究では，日本，中国，フィリピン，バングラデシュの合計 4 カ国 12 回にわたる詳細な調査が実施されている。

第 2 章では，主にバングラデシュの独立（1971 年）前後から 2000 年代までのマクロ経済政策の変遷を整理し，さらに独立後の女性に対する政策が同国の成長戦略，貧困削減戦略の一環として取り込まれてきたことが示されている。なかでも，2 人の女性首相が政権を担った 1990 年代において政府は構造調整政策に積極的に取り組み，その際、「ジェンダーと開発」政策を重要な戦略として位置づけた。

第 3 章はバングラデシュにおける工業化の過程を産業構造，就業構造，輸出構造のそれぞれの変化に着目して把握されているほか，工業政策の変遷，バングラデシュ縫製業の概要が整理されている。また，FDI（海外直接投資）の動向分析から，繊維部門への投資が多くなっていること，それは 1974 年に締結された MFA（多角的繊維協定。MFA は 2005 年に失効）から逃れるようにして，韓国や香港，台湾などの企業がバングラデシュに工場を設立したことを述べている。さらに，著者はバングラデシュの「輸出向け」縫製産業の嚆矢となった韓国企業大宇と現地資本との合弁企業に注目し，この企業で技術や知識を得た者がスピンアウトして産業の裾野を拡げていったことを高く評価している。

第 4 章は，バングラデシュ縫製産業の担い手である女性労働力に関する分析である。統計資料や既存研究に基づいて，農村地域において伝統的就業構造が解体し，「パルダ」に基づいたジェンダー規範が揺らいでいくことなどによって，女性が都市部の賃金労働へ参入していったことを明らかにした。また，FDI の主な受け皿と考えられる輸出加工区の労働力構造を分析し，労働力の 7 割が女性であることを示したほか，縫製産業における女性労働力の概要と労働環境などの全体像を既存研究から論じている。

第 5 章以降は著者が独自に調査を実施したマツオカの事例を取り上げている。第 5 章では，企業グループの組織概要，バングラデシュ工場（社名：マツオカアパレル）の設立経緯，生産概要についてジェンダーによる視点を織り交ぜながら説明したうえで，日本向けの低価格ショートパンツを事例に，生産と労働過程を描き出している。

特に注目に値するのは事例分析である。ここでは，日本向けの低価格ショートパンツの生産ライン配置の見取り図（本書の図 5-3，p.187）をもとにしながら，労働者 117 名のデータと，マツオカの中国工場からの技術者数名への聞き取り情報とともに，生産工程（縫製および仕上げ）と労働者過程（学歴，出身県，縫製経験・技術など）について厚みのある分析が行われている。分析の結果，女性労働者（工員）は経験や技能が賃金というかたちで正当に評価されておらず，生産工程への適切な配置もなされていないこと，マツオカは中国工場も日本本社もバングラデシュ工場の組織や人事労務管理についてほとんど関与しておらず，生産現場の幹部職にあたる者はバングラデシュ男性であること，などが示された。

第 6 章ではバングラデシュ工場の女性労働力に着目し，ウォーラーステインの「商品連鎖」論を援用しながら労働者の熟練度，賃金査定および世帯／世帯保持について 6 つの具体的事例を挙げながら論じている。熟練度については労働者を「熟練」「半熟練」「未熟練」に区分し，「半熟練」の労働者において縫製経験年数が賃金を規定していないこと，女性労働者の収入は本人の世帯のみならず複数の世帯の収入として機能していること，女性のなかでも伝統的規範のはざまで自由な自己選択をしている事例もあることなどを示した。

続く第 7 章では，マツオカにおける企業内（グループ内）技術移転がジェンダーの視点を取り入れながら論じられている。本書では，第一次移転（日本本社から中国の工場への技術移転），第二次移転（中国の工場からバングラデシュ工場への技術移転）の仕組みがそれぞれ説明されている。後者については，バングラデシュ工場の企業組織上存在するジェンダー非対称な労働力配置（技術者は中国人女性，技術情報を直接受けるのはバングラデシュ男性）の仕方，中国人技術者がベンガル語を駆使できないため技術移転が円滑に行われないといったことから現時点での技術移転には限界があることを指摘している。

最後の第 8 章は結論である。各章での分析において明らかになった点がまとめられているほか，マツオカのバングラデシュ進出と「移転」が同国の女性にもたらしたことについて，「光」と「影」の側面とに分けて考察され，最後に日系縫製企業に向けた提言がなされている。「光」と「影」の点について，前者では日系縫製工場で働いていることを意識し，高く自己評価する女性が多いことを指摘し，それは日系工場が地場企業よりも労働環境が良く，産休・育休後も職場復帰する女性がいることなど，地場企業で働く女性と日系縫製企業で働く女性との差異が存在することを論じて

いる。「影」については，女性工員の大半は収入が少ないうえ昇進昇格の道が閉ざされていること，「使い捨ての労働力として」（p.271）特定の工程にのみ従事するため，さらなる技術習得を希望する者がいるにもかかわらず多様な技術が習得できないなどが指摘されている。

本書全体を通してみると，第1章から第4章においてバングラデシュにおける経済政策や縫製産業の成長要因分析が示されたのち，第5章から第7章において日系縫製企業のマツオカを例にした緻密で詳細な実証研究により，縫製企業の展開実態，女性労働力の熟練度・賃金査定・世帯／世帯保持等に関する分析と企業内技術移転の実態や問題点が明らかにされた。とりわけ，第5章以降のマツオカの事例研究は，ジェンダーの視点からみた労働力と労働現場の問題，技術移転の実態と問題点が見事に浮き彫りにされており，高いオリジナリティをもっている。このように，独自のきわめて詳細な調査をもとにした分析により，本書の目的は達成されているといえる。

最後に，評者の研究・関心分野である経済地理学の視点を交えながら，気になる点を3つ指摘したい。まず，バングラデシュ縫製産業の存立構造と持続的発展の可能性を探るうえでは，関連産業の動向，企業間連関の実態，産業集積構造などについての検討が必要であるが，本書ではあまり触れられていなかった。こうした点について関心を持つところである。また，ジェンダーの視点からは，隣国インドにおけるムスリムとの差異についても気に掛かる。評者の調査によると，インドにおけるムスリム居住地区の縫製工場では男性が従事し，女性は補助的な存在としての役割に限定されている（家内制の場合など，そうではない事例もありうる）。こうした国・地域による違いの要因や背景について知りたいところである。

2点目に，労働者個人の詳細な情報・分析は，本書の骨格をなす極めて貴重なものであるが，一方でマツオカという特定の企業を対象に論じるのであれば，経営戦略，立地戦略を含んだ同社全体に関する企業戦略を示す必要があると思われる。残念ながら，本書においてこの点の分析は希薄であった。本書では事実を提示することによってマツオカの意図・意思を説明し，そのことをもって企業戦略を描き出そうとしているように読み取れる。しかし，それは主体の自発的な意思・行動を反映した「戦略」とは限らない。企業自らの意図をも含めて企業行動を把握するには，企業戦略の把握が必要であると思われる。とはいえ，企業調査には秘匿事項や回答を得られないことも多い。そのような難しさがあることは評者も承知しているつもりである。

3点目に，グローバル経済の進展下において，中国での操業リスクと賃金の側面を主な要因として縫製業が低賃金諸国に移転していくことが，マツオカのように中国からバングラデシュへの移転をもたらしたわけだが，賃金コストの面を考えればバングラデシュであっても中長期的には他国へ移転せざるを得ない。しかし，バングラデシュには技術や知識が地域に埋め込まれてきたわけであるし，相当規模の産業集積も形成されたはずである。そうした状況において，バングラデシュ縫製産業の今後はどのような展開が考えられうるのだろうか。中国での操業リスクとバングラデシュの低賃金といった要因分析の先にある，バングラデシュ縫製産業の持続的発展の可能性について著者の持論を伺いたいところである。

以上，評者の関心に由来する指摘を述べたものの，本書の高いオリジナリティが損なわれることはないと確信している。本書が南アジア地域研究および経済研究，縫製産業研究に大きく貢献することに疑いの余地はない。100名以上の労働者について大量の詳細なオリジナル・データを用いた長田氏の丁寧な分析には，ただ脱帽するばかりである。評者もバングラデシュで現地調査・研究を行いたいという欲求に駆られた。本書が南アジア地域研究者や社会科学の研究者など多くの読者に読まれ，現地で調査したいという欲求に駆られる若手研究者が1人でも多く誕生することを期待したい。

（2014年11月6日受付）
（2015年1月23日受理）